

土佐さきがけプログラム カリキュラム・ポリシー

土佐さきがけプログラムでは、「グリーンサイエンス人材育成コース」、「国際人材育成コース」、「生命・環境人材育成コース」、「スポーツ人材育成コース」を設置し、地域社会の課題から国際問題、環境問題などの現代社会が抱える様々な課題に積極的に取り組む人材を育成します。そのため、幅広い知識や技術などの基礎力を領域横断的に修得することをめざします。そして、それらの知識を統合して物事を考える力と外部への発信力、グローバルな変化に対応して社会貢献できる汎用的能力を身につけることを共通の教育目標とします。各コースは、この共通目標を踏まえて具体的な人材育成目標を定め、それに基づいて設定したディプロマ・ポリシーを達成するためのカリキュラムを、下記のとおり編成しています。

■グリーンサイエンス人材育成コース

グリーンサイエンス人材育成コースでは、化学を基盤とし、環境に配慮した次世代型産業の技術・開発・学際研究を通じて、国際的に通用する高度な専門知識や技術を身につけた環境問題・資源問題などの解決に貢献できる人材を育成することを目標とし、ディプロマ・ポリシーを設定しています。このディプロマ・ポリシー達成のため、カリキュラムを次の方針により編成し実施します。

【教育内容】

1. 化学の基礎を修得したうえで、研究を通して化学者としての技量を高めると同時に、科学者としてのバランス感覚を養うために、学士課程・修士課程を通じた6年一貫のカリキュラムを編成しています。
2. 学士課程では、科学者として必要とされる基礎的な能力や教養を身につけるために、共通教育科目として、課題探求実践セミナーなどの初年次科目や教養に関する科目を配置しています。
3. 化学分野についての関心と疑問を持ち、自ら探究し、解決する意欲を涵養するため、学士課程初年次から実験科目を配置すると同時に「GS 特別講義Ⅰ」、「GS 特別講義Ⅱ」を、2年次には「GS 実験Ⅰ」、「GS 実験Ⅱ」を開講し、専門的な研究内容に触れることができるようにします。
4. 広い分野の化学の基礎的な知識、さまざまな現象を化学的に理解できる能力、合成・分析・解析などの化学に関する基礎技術、観察により得た事実や実験から得たデータを論理的に考察し現象を説明できる能力が修得できるよう、化学分野を網羅する有機化学、無機化学、物理化学、分析化学の基礎科目を学士課程1年次に、2年次にはその発展・応用科目を、3年次には各演習科目を必須科目として段階的に配置しています。
5. 現代社会の諸問題を化学に関連付けて理解し、その解決に向けて研究を展開する習慣を身につけるため、学士課程3年次には「GS 実験Ⅲ」、「GS 実験Ⅳ」を配置して各研究室で実施されている先端研究に参加し、学士課程4年次には「GS 課題研究」を配置し、修士課程での「学術論文作成セミナー」のための基礎データを集積して、

修士論文作成を視野に入れた研究活動を4年次に行います。

【教育方法】

1. 1年次から2年次までは、コース長、副コース長が、3年生以降は「GS実験Ⅲ」、「GS実験Ⅳ」および「課題研究」担当教員との個別面談を通して、学生生活と学修成果の振り返りを行い、課題解決に向けて自律して学び続ける姿勢を培います。
2. 学生の主体的な学びを促進するために、アクティブ・ラーニング型の授業科目を置くとともに、時間外学習を想定した授業設計を行います。
3. 課題研究のパフォーマンス評価と最終審査はコース担当の全教員により行います。
4. 学修ポートフォリオやそれに基づいた学生面談を行い、学生の到達度を把握しつつ指導する体制をとります。

【教育評価】

1. 授業評価アンケート、卒業予定者アンケートの結果などに基づいてカリキュラムの点検・評価を行います。
2. 上記の指標に加えて、時期を定めて教員による学生面談を実施し、形成的評価を行うことで学生の到達度を把握し、指導方法の見直し、改善を行います。

■国際人材育成コース

国際人材育成コースでは、英語・中国語・日本語を駆使し、高いコミュニケーション力とともに、文化的、歴史的背景による価値観の違いを乗り越えて、自文化と異文化を理解する心を持ち、国際社会の発展に貢献できる人材の育成をめざします。そのような人材に必要な基礎的な能力や教養を身に付けるために、共通教育科目として、課題探求実践セミナーなどの初年次科目や教養に関する科目を配置しています。専門科目については、カリキュラムマップにおいて、語学系、人文科学系、社会科学系、研修系科目に分けて明示し、学修の集大成として、「卒業課題研究」および「Graduation Reviews」を配置しています。

【教育内容】

[1・2年次]

1. 英語と中国語をコミュニケーションの道具として駆使するために、聞く・話す・読む・書くという4技能を高める演習に重点をおいた専門科目を配置しています。
2. 国際情勢や国際社会における課題を理解し、その背景や原因を考察するために、政治学、法学、経済学などの基礎を学ぶための専門科目を配置しています。
3. 自文化と異文化を理解する心を育み、国際コミュニケーション力を育成し、文化的背景の異なる人々とも深くコミュニケーションが行えるよう、「異文化理解」と「対人コミュニケーション論」を必修とします。
4. 地域の課題を発見し、原因を分析する力を身につけるために、初年次科目として「大学基礎論」、「学問基礎論」、「課題探求実践セミナー」を配置しています。更にフィ

ールド学習やグループワークを通じて地域の活性化について考察するために、「Japanese StudiesⅢ Kochi Studies」等を配置しています。

5. グローバルに活動している国際機関、企業、市民社会の変化等について理解を深め、自らのキャリアについて考察するために「国際講座Ⅰ～Ⅳ」を配置しています。

(2年次)

6. グローバルな視野で考察できる能力を身につけ、自ら探究するテーマと3年次の研修先を決定するために、「海外(国内)研修・インターンシップⅠ」を配置しています。

[3・4年次]

1. 卒業後のキャリアにおいて必要とされるリーダー力や対外発信力を身につけるために、「多文化経営論」や「International Journalism and Media」を配置しています。

(3年次)

2. 留学またはインターンシップを行い、研修テーマに関する学修目標を自ら設定し、主体的に取り組むために、「海外(国内)研修・インターンシップⅡ」を配置しています。

(4年次)

3. 日本語・英語・中国語を高度に駆使し、自らの見解を論理的に形成・表現する能力を身につけるために、語学系の発展的専門科目を配置しています。
4. 留学またはインターンシップで得た知識や経験を元に、関係者と議論を行い、その成果を発表する力を身につけるために「海外(国内)研修・インターンシップⅢ」を配置しています。その成果について、パワーポイント等を活用し、外国語によるプレゼンテーションを行います。
5. 4年間の学修の成果として、研修テーマに関して、課題の発見・探究を行い、解決に向けた方策を考察し、論文作成を行うため、「卒業課題研究」、「Graduation Reviews」を必修とします。

【教育方法】

1. 少人数教育に徹し、個々の授業では自分の意見を的確に伝えるとともに、他人の意見に耳を傾け、議論を通じてよりよい結論を導けるようディスカッション、グループワークを積極的に取り入れます。
2. 学生の視野を地域から世界に広げ、課題発見力、探究力、解決力を育成するために、フィールド学習の機会を提供するとともに、3年次に一定期間の研修・インターンシップを行います。
3. 多面的な観点から社会的事象を分析し、グローバルなコミュニケーション力を養うために、多様な文化的背景を持つ学生との混成クラスを編成するとともに、外国人学生との共同授業も行います。
4. 指導教員、アドバイザー教員との定期的な個別面談を通じて、学生個々のニーズに

合致した研修テーマや研修・インターンシップ先の指導を行い、主体的に学び続ける姿勢を養います。

5. 卓越した活動実績を有する外部講師を招へいし、知識と実践の結び付きを考察する機会を提供し、自らキャリア形成する力を養います。

【教育評価】

1. 授業評価アンケート、卒業予定者アンケートの結果などに基づいてカリキュラムの点検・評価を行います。
2. 上記の指標に加えて、時期を定めて教員による学生面談を実施し、形成的評価を行うことで学生の到達度を把握し、指導方法の見直し、改善を行います。

■生命・環境人材育成コース

生命・環境人材育成コースでは、人間を含む地球上のすべての生物にとって健全な生存環境を構築するために、生物の生命活動とそれを支える環境に関連する諸科学を領域横断的に教育し、生命を育み、護り、次の世代へ繋ぐために必要となる様々な問題を俯瞰し、解決策を提案して、それを遂行することのできる人材の育成をめざし、ディプロマ・ポリシーを設定しています。このディプロマ・ポリシー達成のため、カリキュラムを次の方針により編成し実施します。

【教育内容】

1. 社会人として必要とされる基礎的な能力や教養を身につけるために、共通教育科目として、課題探求実践セミナーなどの初年次科目や教養に関する科目を配置しています。
2. 生命とそれを育む環境ならびにこれらに関連する諸科学を体系的に理解し、その専門的知識を修得するための基盤となる科目を、1、2年次を中心に必修科目として配置しています。
3. 動物・植物・微生物を取りまく環境が果たす役割、生命と環境の調和、様々な環境問題の解決について、ミクロおよびマクロな視点から体系的に理解し、自ら幅広く考えることができるようにするため、専門科目（選択科目）を「生命科学の基礎に関する科目群」、「生命科学の応用に関する科目群」、「生命を支える環境と生態系に関する科目群」、「人間と環境・社会に関する科目群」の4つに区分し、これらの科目を、2、3年次を中心に、段階的に配置しています。これらの履修を通じて、動物・植物・微生物の生存環境の維持や健全性回復が、人間にとっても健全な生存環境の構築につながることを理解することができます。
4. 生命を育み、護り、次の世代へ繋ぐための様々な課題を俯瞰し、解決策を提案し、文章や図表を用いて表現できる能力を育てるため、2年次に「研究室インターン」を配置しています。
5. 生命活動とそれを支える環境ならびにこれらに関連する諸科学に関する知識と研究成果を、地域社会の活性化につなげようとする意欲を高めるために、3年次に「産

官学連携インターンシップ」を配置しています。

6. 学修した内容を統合し、地域社会を視野に入れた観点から成果を示し、関係者・研究者と議論し、課題解決に向けた提案ができるようにするために、3年次第1学期から研究室に所属することで、早い段階から最先端の研究に触れ、4年次の卒業論文研究に発展させます。

【教育方法】

1. 1年次から2年次まではアドバイザー教員、3年次以降は卒業論文の主旨導教員との個別面談を通して、学生生活と学修成果の振り返りを行い、課題解決に向けて自律して学び続ける姿勢を培います。
2. 学生の主体的な学びを促進するために、アクティブ・ラーニング型の授業科目を置くとともに、時間外学習を想定した授業設計を行います。
3. 「研究室インターン実習」「産学官インターンシップ」では、学生のコミュニケーション力や協働実践力を養うため、教員・研究室メンバー、学外関係者による評価やフィードバックを取り入れます。
4. 卒業論文は主旨導教員、副指導教員による複数の指導体制の下で行います。また、そのパフォーマンス評価と最終審査はコース担当の全教員により行います。
5. 学修ポートフォリオやそれに基づいた学生面談を行い、学生の到達度を把握しつつ指導する体制をとります。

【教育評価】

1. 授業評価アンケート、卒業予定者アンケートの結果などに基づいてカリキュラムの点検・評価を行います。
2. 上記の指標に加えて、時期を定めて教員による学生面談を実施し、形成的評価を行うことで学生の到達度を把握し、指導方法の見直し、改善を行います。

■スポーツ人材育成コース（副専攻）

スポーツ人材育成コースでは、所属する学部・学科（主専攻）における専門分野の学びとスポーツ活動を両立させ、専門分野とは別に副専攻としてスポーツを科学的に学び、競技力および指導力の向上のために自律的で積極的に取り組みながら、専門知識を論理的に理解し、それを具体的・実践的に用いて、競技力・指導力を向上させるための提案ができることを修了時の達成目標として設定しています。また、地域貢献のみならず、国際舞台においても優れた指導力を発揮し、スポーツの活性化やスポーツを通じた貢献を行える人材の育成をめざしています。この目標を達成するため、カリキュラムを次の方針により編成し実施します。

【教育内容】

スポーツ科学を体系的に理解するために、①「自己の競技力向上」を目的とした授業

科目群、②指導法などを身につける「他者への支援」を目的とした授業科目群、③「地域貢献」に関わることを目的とした授業科目群の3つの科目群を配置しています。

「自己の競技力向上」の科目群では、「スポーツ生理学」、「スポーツ心理学」および「トレーニング論」を通して、運動時の心身の動きやメカニズム等のスポーツ科学の理論を論理的に理解する能力を養成します。また、「トレーニング実習」や「専門実技演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を通して、自らの競技力及び指導力実践の向上を図るために専門知識を具体的・実践的に活用する力を身につけます。

「他者への支援」および「地域貢献」の科目群では、スポーツ指導やコーチング理論、地域スポーツクラブの運営等について学び、学修した内容を統合しながら相手の立場や役割を理解し、地域社会を視野に入れた観点から協働的に地域のスポーツ振興に貢献できる力を身につけます。

【教育方法】

1. 4年間を通して、主として個人の体力増強や競技力向上のためのトレーニング計画を論理的に立案・実施して競技力向上のための基礎的体力を養成し、科学的な理論に基づく合理的な実践を通して自律的で積極的に競技力と指導力を高めます。
2. 1年次には、「専門実技演習Ⅰ」、「生涯スポーツ論」などを配置し、生涯スポーツ及び地域スポーツの振興施策などの基礎知識について学びます。その際、自律的に課題を発見し、原因を追究しながら解決する思考を養成します。
3. 2年次には、「専門実技演習Ⅱ」、「スポーツ栄養学」、「スポーツ心理学」、「トレーニング論」、「スポーツ生理学」などの科目を配置し、競技力及び指導力の向上のために、科学的な理論に基づく合理的な実践を通して得られた成果を論理的に分析し、スポーツ指導に活用することができる能力を涵養します。
4. 3年次には、「専門実技演習Ⅲ」を配置し、競技力向上のためのスポーツ諸科学を理解するとともに、スポーツ指導やコーチングに必要とされるコミュニケーション力や周囲と協働的に専門知識を応用する協働実践力を養成します。
5. 4年次には、「スポーツ指導演習」を配置して、時間外学習を想定した授業設計を行います。学修されたスポーツ指導やコーチングの実践力を統合的に用いた指導演習を行います。その際、教員からのフィードバックや学生間のピア評価などを取り入れます。

【教育評価】

1. 授業評価アンケート、卒業予定者アンケートの結果などに基づいてカリキュラムの点検・評価を行います。
2. 上記の指標に加えて、時期を定めて教員による学生面談を実施し、形成的評価を行うことで学生の到達度を把握し、指導方法の見直し、改善を行います。